

この後に、「各授業時間に」「実験室での教育」に関する細かい注意が延々と続く。

こうした極めて具体的な諸注意（マニュアル）を、「教師必携」として教員一人一人に渡し、授業の改善向上を図ろうとしているのがアメリカの大学である。言い換えれば、このマニュアルが授業評価の一種の「基準」（註2）になっている。

（註2）このようなマニュアルでは、授業の学問的水準までは評価できない。その意味では、授業の「心構えや進め方」に関する評価基準に過ぎないかもしれないが、それでも「無い」よりは、はるかに効果的であるばかりでなく、学外に対して「教育が熱心に行われている」ことをアピールする効果がある。

これまで本稿で、個人のケース・スタディとして取り上げてきた「学生の授業評価」も、こうした全教員に共通する授業マニュアル（授業評価基準）が存在して初めて意味を持つ、と考えられる。

個々の教員が、ただ思いつきに「学生の授業評価」をしたところで、せいぜい個人の授業改善に役立つのが精一杯である。それはそれで大事なことに違いないが、問題は、それをどうやって大学全体の教育水準の向上に結びつけるか、ということにあらう。

以 上

方」には、次のような注意が書かれている。少し長いが一部紹介してみよう（要約、筆者）。

〔学期の始まる前に〕

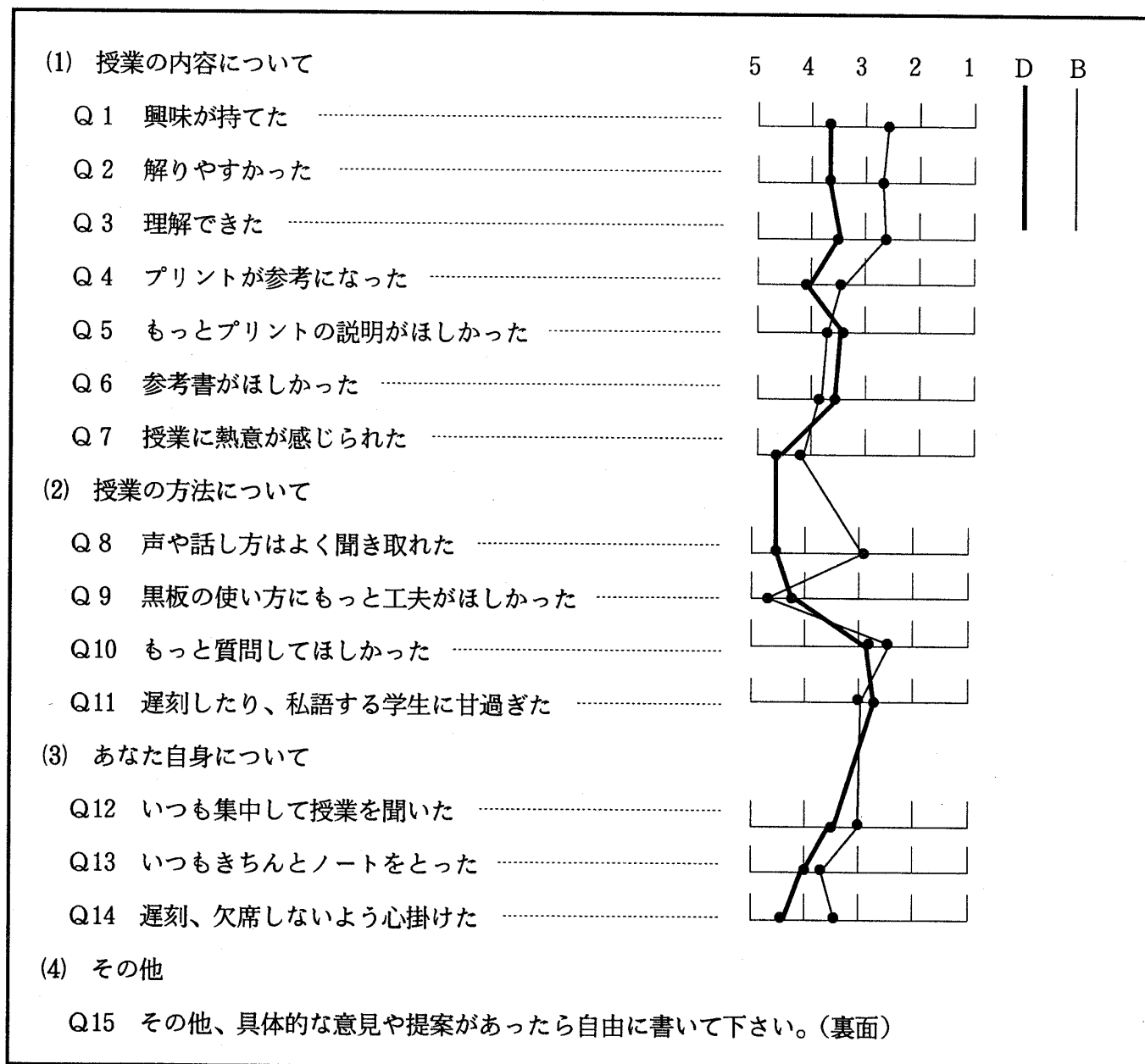
- ① 科目の目標に照らし、全学期の授業計画を発表する
- ② そこでは、授業で力を入れる主題と省略する主題を決め、力を入れる主題に十分な時間をかけるよう工夫する
- ③ また、時間の関係で省略した主題については、学生が自習できるようにしておく
- ④ 発表する授業計画は、全教材、取り上げる問題の提示の順序、それに問題の中で話す話題の順序など、すべてのものを含んだものでなければならない
- ⑤ ある主題から次の主題に移る時出す質問を、予め計画しておく
- ⑥ 授業時間の 5 % 程度をテストのため使うとよい
- ⑦ 学生の学力を予め知っておくために、新学期第 1 週に学生の予備知識をテストすること
- ⑧ また、模型、図表、スライドのように準備に時間のかかる補助教具は、学期が始まる前に入手手続きをしておく
- ⑨ さらに、予め教室を点検し、暖房、照明、音響等の特性や、それらの調節装置をよく知っておくこと
- ⑩ 特に、黒板がどの方向から見ると光って見えないか、後ろの席から見てどの程度大きい字を書けば解るのか確かめておくこと

〔授業の前に〕

- ① 講義のノートを準備し、必要な時にチラッと見るだけで済むよう、よく頭に入れておくこと。ノートを持っていくことは、本当は望ましくない
- ② 教材や、それを示す順序、方法などを、始めから終わりまで下稽古しておくこと。下稽古を恥ずかしいと思っていけない
- ③ 前に同じ授業をしたことがある時は、もっといい授業ができなかったか、自己批判書を書いておき、それに基づいて改善を図ること
- ④ あまり多くの教材を使って学生を忙しくするより、なるべく少ない教材を徹底的に教えるよう心掛けること
- ⑤ 教科書を使う場合には、最も重要な箇所にアンダーラインを引かせ、参考資料を教えて、その使い方を指導すること
- ⑥ 学生の興味をそそり、討論の刺激になるような質問を常に用意すること
- ⑦ 学生が問題に取り組む前に、結論を教えることは、学生から考える力を奪うことになる
- ⑧ 授業をしながら、ちょっとした学生の表情や仕草の変化を見逃さず、それに適切に反応する
- ⑨ 教師と学生は、共同して同じ仕事をしているのだから、教室でも廊下でも、学生を名前で呼ぶ習慣を身につけるべきである

今後「学生の授業評価」が広く行われるようになるためには、こうした攪乱データをどう読むか、というケース・スタディの積み重ねが必要であろう。

(表2) D組(小学校教員志望)とB組(幼稚園教員志望)の比較



V. 「学生の授業評価」のもう一つの意味

以上は、一教員の「授業改善」のための、いわば個人的な資料に過ぎない。初めにお断りしたように、「学生の授業評価」を、そのまま教員個人の教育能力や教育業績の評価に使うことに無理がある。

しかし、それでは「個人的資料」としての意味しかないのか、と言えば、必ずしもそうではあるまい、と考える。

アメリカの優れた大学の一つであるMITには『教師と学生—講義の方法』(You And Your Students)という、いわば「教師必携」とも言うべきマニュアルがあって、その第4章「授業のやり

		修正前の成績	理解度
A組	A組（小学校教員志望）	69.9点	3.31点
	B（幼稚園教員志望）	63.7	2.57
	C（幼稚園）	66.4	3.25
	D（小学校）	64.9	3.47
	全平均	66.3	3.16

学生の成績平均点が低すぎ、修正（底上げ）を余儀なくされたことについては既に述べたが、その主たる原因は、「学生の授業評価」の中の「理解度」平均が〔3.5点以下〕だったことにあった、と思われる。

それに加えて、試験問題がやや難しかったかもしれない。（註4）

（註4）ただそうは言っても、教員採用試験の中の『教育原理』は、もっと内容が高度で、試験問題も難しい。そのレベルに合わせた授業をすれば、「理解度」はもっと落ち、半数近くが落第しかねない。そういう実状の中で、どういう授業をすればいいのか、という問題が残る。

2）「学生の授業評価」を実施するのはいいが、その結果を、どう評価するのか、というケーススタディが今後必要になろう。

その一例が、B組とD組の比較である。（表2）

〔授業評価〕	B組	D組
（Q1） 関心度	2.40点	3.67点
（Q2） 難易度	2.46	3.61
（Q3） 理解度	2.53	3.47
（Q8） 話がよく聞こえた	2.84	4.47
（Q12） 授業に集中出来た	2.86	3.41
〔成績〕 修正前平均	63.7	64.9

これを見ると、授業に対する「関心度」「難易度」「理解度」「集中度」のいずれをとっても、D組の方がB組より約1ポイントも高い。

にもかかわらず、「成績平均」がほとんど変わらないのは何故だろうか。「学生の授業評価」と「成績」は関係がないようにも見える。

もしそうだとしたら、「学生の授業評価」は、一体何を意味しているのだろうか。今回の調査からだけでは、残念ながら、何故このようなことになるのか、という理由がわからないが、ただ言えることは、B組のデータには他の3組と比べて少々異常なところがある。この調査に現れない何か特殊事情が、B組にはあるのではないかと推測するしかないように思われる。

(1) 「学生の成績」の概要

学生のクラス別平均「成績平均」次のようになった。

成績平均	
A組（小学校教員志望）	69.9点
B（幼稚園教員志望）	63.7
C（幼稚園）	66.4
D（小学校）	64.9
全平均	66.9

このように平均点が60点台では、20%近くが落第点（60点未満）になってしまう。これでは適切な「成績」とは言い難いことから、全体平均点（66.3）を75点（ 66.3×1.13 ）に底上げし、実際の「成績」は各人の得点を1.13倍したものとせざるを得なかった。

その結果、クラス別平均点と成績分布は以下のようになった。

	60点以下	60点台	70点台	80点台	90点台
A（78.9）	0人 0%	6 12	20 39	18 35	7 14
B（71.9）	2人 4%	17 37	18 39	6 13	3 7
C（75.0）	1人 2%	6 13	23 51	13 29	2 4
D（73.3）	2人 4%	14 27	26 51	8 16	1 2
全体（75.0）	5人 3%	43 22	87 45	45 23	13 7

このように「成績」を修正した結果、「落第者」は3%程度となり、成績分布もほぼ正規分布に近くなった。

(2) 「学生の授業評価」との関係

そこで、この「学生の成績」と「学生の授業評価」との関係を見ると、次のようなことが言えるのではないか、と思われる。

- 1) 「学生の成績」と「学生の授業評価」（「理解度」）の間には、当然のことながらかなり高い相関関係があることが予想され、少なくとも「理解度が[4点＝「どちらかと言えば、理解出来た」]に近い授業をする必要があろう。その関係を示したのが下表である。

などによるものと考えられる。

もしそうだとすれば、今後、小学校志望組と幼稚園志望組とでは、授業の内容や方法を変える必要があるかもしれない。(註3)

(註3) ただ、もう一つの幼稚園志望組(C組)と小学校志望組(A、D組)との間には、授業内容に関する評価点にほとんど差がないことから、これはB組特有の問題とも考えられ、今後さらに究明する必要がある。

(2) 授業方法の評価について

授業方法に関する評価(全体)が低かったのは、

Q5=プリントの説明(2.62)

Q6=参考書の与え方(2.63)

Q9=黒板の使い方(1.76)

などの点で、学生がもっとキメの細かい授業を望んでいることがわかる。それはそれでわからないではないが、反面、学生の授業の受け方や勉強のし方にも、今後検討を要する問題点があると思われた。

まず、授業を開講するに当たって、「大学は中学や高校と違って、先生のしゃべったことをノートに取り、それを暗記するところではない」「解らないことを自分で調べ、自ら考える力をつけるのが大学の勉強だ」と、かなり口を酸っぱくして説明し、最小限必要な知識は、板書代わりのメモをプリントして配った。その上で、「問答式」の授業を進めたこともあって、板書は勢いメモの殴り書きのようになった。

大学の授業は本来そういうものだ、と思っているが、短大の学生の授業評価では、「先生が、教えることを覚えやすいようにきちんと板書するのがいい授業だ」ということになるのだろう。

Q5(もっとプリントの説明がほしかった)の評価も、この板書に関する評価と一脈通じるものがある。

こういう「ノートをとって覚える」という勉学のし方しか知らない学生を相手に、これからどうやって「考える」力を付ける授業を展開すればいいのか、という問題は、前述の教員採用試験のあり方にも関係する根の深い問題で、短大教育の基本に関する重要な課題であると考えられる。

VI. 「学生の授業評価」と「学生の成績」との関係

以上のような「学生の授業評価」と、実際の「学生の成績」(註4)との間には、果してどういう相関関係あるのかどうか、についても検証してみた。仮に両者の間に「ほとんど関係がない」のであれば、「学生の授業評価」が持つ意味もそれだけ小さいものになろうし、その反対ならば、「学生の授業評価」の読み方に、また別な意味が加わってくるからである。

た話にはほとんど興味を示さない。

それより、テレビの『金八先生』や、山田洋次監督の映画『学校』を見せた方が、はるかに効果的であることがわかっていても、それでは教員採用試験には合格できない。（註2）

こうした例でも解るように『教育原理』の授業は、教員採用試験を常に意識し、「ペスタロッチと問われたら、『隠者の夕暮れ』と答えろ」という暗記科目のように成らざるを得ない。

（註2）この『教育原理』に限らず、教員養成課程の授業の多くは、教員採用試験によって授業内容が大きく制約されている。本来は、いい教員になるために望ましい授業が行われ、その内容に合わせた採用試験が行われてしかるべきなのに、採用試験に合わせた授業が行われている。これでは、主客転倒である。

東大教育学部の教官スタッフが、教育学専攻の学生用に書いた『教育原理』は、よくできたテキストだが、これを読んでも教員採用試験は通らない。

b) 授業内容の評価に関する第二の問題点は、小学校教員志望者と幼稚園教員志望者とでは、同じ『教育原理』の授業でも学生の「関心度」「難易度」「理解度」が違ってくるように見えることである。

以下は、最も授業評価点が高かった小学校志望組（D組）と、反対に最も低かった幼稚園志望組（B組）の評価点を比較したもので、各問ともにD組の評価がB組より1ポイント以上高くなっている。

「関心度」 D=3.67 B=2.40

「難易度」 同=3.61 同=2.46

「理解度」 同=3.47 同=2.53

つまり、D組の方がこの授業への「関心度」「理解度」などが高かった。この差が、統計上の「有意の差」であるかどうかを即断することはできないが、かと言って、「偶然の差」とは考えにくい。他の質問の評価点を比較しても

Q7 （授業に熱意が感じられた）

D=4.42 B=4.14

Q8 （授業の声や話し方はよく聞き取れた）

D=4.47 B=2.84

Q12 （いつも集中して授業を聞いた）

D=3.41 B=2.86

と、D組とB組では授業に対する態度がかなり違っている。特に〔Q8〕は、B組では私語が多く教室がざわめいていたことを物語るものである。

その理由としては

① B組にたまたま授業に対する真剣さを欠いた学生が多くいた

② 幼稚園教員の採用には必ずしも『教育原理』などの試験がないために勉強意欲が湧かない、

Q11 (授業の厳しさ＝修正換算値、3.19

の 5 問だった。

(2) マイナス評価を受けた項目

マイナス評価（〔3〕以下）を受けたのは

Q 5 (プリントの説明＝修正換算値、2.62)

Q 6 (参考書の与え方＝ 同 2.63)

Q 9 (黒板の使い方＝ 同 1.76)

の 3 問である。

(3) 学生の勉学態度 (Q12－Q14) は

Q12 (集中して授業を聞いた＝ 3.07)

Q13 (きちんとノートをとった＝ 3.57)

Q14 (遅刻、欠席がないようにした＝4.30)

で、授業に対する集中度はいま一つだが、全体的にはまずまずの勉学の態度だったと思われる。

以上の調査結果から、次のような授業風景が浮かび上がる。

「自前のプリントを配って、大きな声で熱心に授業をしている。時々質問したり、私語を注意したりするが、反面、プリントが不親切だったり、黒板の書き方が乱暴だったりして、教師自身が思っているほど学生は授業に満足していない。半分ちょっとの学生はきちんとノートをとっているが、ただ遅刻や欠席だけはしたくない、というだけの学生もかなりいる」

(2) 「学生の授業評価」の問題点

(1) 授業内容に関する学生の評価について

a) 「関心度」「難易度」「理解度」とも、評価点が〔3点〕（「どちらとも言えない」）よりわずかなプラスに止まっている。本来なら〔4点〕（「どちらかと言えばそう思う」）程度になるのが望ましいが、これには教え方の巧拙の他に、次のような理由が考えられる。

①『教育原理』という教科は、いわば「教育学入門」「教育入門」的性格を持ち、その内容は教育方法論、教育哲学、教育史、教育心理学、教育社会学、教育行財政論など様々な分野の寄せ集めで、独立した体系を持った学問とは言い難いため、学生の関心が分散して、興味が集中できない。

②それでも、「教員に成るための基礎知識や心構えを教える」教科と考えれば上手な教え方はあろうが、その障害になっているのが、教員採用試験である。

一例を上げれば、ペスタロッチが、なぜ貧民学校を作り、そこで何を教えようとしたのかを解らせるには、産業革命によって貧困化していったヨーロッパの農民の社会的状況についての理解が前提になる。しかし、高校時代に西洋史を勉強したこともない学生が大部分で、そういっ

調査を実施したのは、4クラスとも最終授業時の最後の20分間で、「これは、これから私がもっといい授業をするための参考資料だから」と、よく趣旨を説明した上で行った。

回答数は以下の通りで、当日の出席者はほぼ全員である。

クラス	回答者数
A組（小学校志望）	49人（在籍52人）
D組（ 同 ）	49 （ 53 ）
B組（幼稚園志望）	44 （ 47 ）
C組（ 同 ）	44 （ 47 ）

なお、このうちQ15の「自由意見」を書いた者は、A組16人、D組15人、B組2人、C組7人で、小学校教員志望クラスと幼稚園教員志望クラスでは受講態度に何らかの差があることが感じられた。

【調査の妥当性】

- ① 当日のほぼ出席者全員が嫌がらずに回答した
- ② 自由記入の意見、感想の内容がかなり率直だった
- ③ アンケート結果が予想したものに近かったなどの理由によって、初めての試みではあったが、「学生の授業評価」（調査）の目的は一応達成できたと思っている。

Ⅲ. 学生の評価結果

(1) 概 況

まず、4クラス全体の評価点平均（表1）は、各問（Q1～Q14）右端の数字のようになる。

（註1）このうち〔Q5〕〔Q6〕〔Q10〕〔Q11〕の4問は、評価点が高いほど授業評価が低かったことを意味することから、（括弧内）に修正換算値を示した。

(1) プラス評価を受けた項目

a：プラス評価点が比較的高かったのは

Q7（授業に熱意が感じられた＝4.29）

Q8（声や話し方はよく聞き取れた＝4.00）

Q4（プリントが参考になった＝3.81）

の3問である。

b：どうやらプラス評価（〔3〕以上）を受けたのが、授業内容に関する

Q1（関心度＝3.24）

Q2（難易度＝3.15）

Q3（理解度＝3.16）

と、授業方法に関する

Q10（質問の仕方＝修正換算値、3.45）

- [3] どちらとも言えない (3点)
 [2] どちらかと言えばそう思わない (2点)
 [1] そう思わない (1点)

の5段階評価方法を取り、各問ごとの平均点を評価点 (5点満点) とした。無記名にしたのは、その方が本音が聞けると思ったからである。

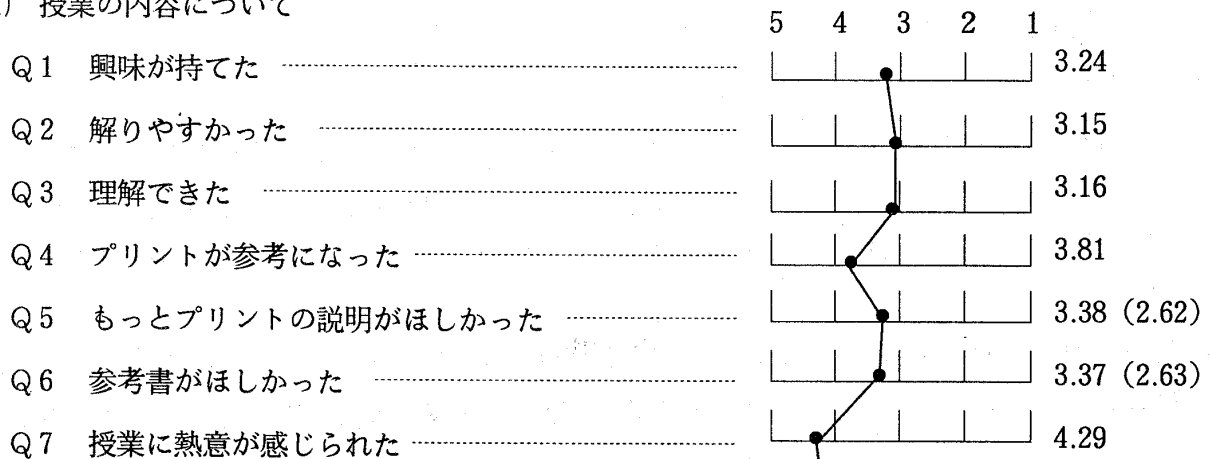
(表1) 授業についてのアンケート

このアンケートは、私の授業の改善に役立てるために無記名で行うものです。率直に答えて下さい。みなさんの意見 (評価) を参考にして、もっといい授業をしようと思います。

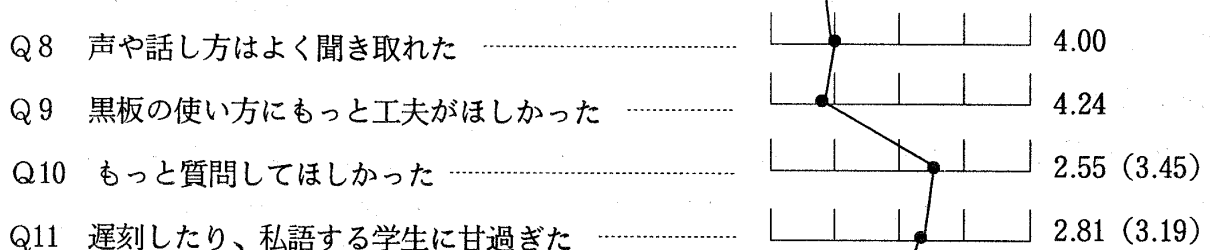
評価は、次の5段階でお願いします。(例)

5—そう思う 4—どちらかと言えばそう思う 3—どちらともいえない
 2—どちらかと言えばそう思わない 1—そうは思わない

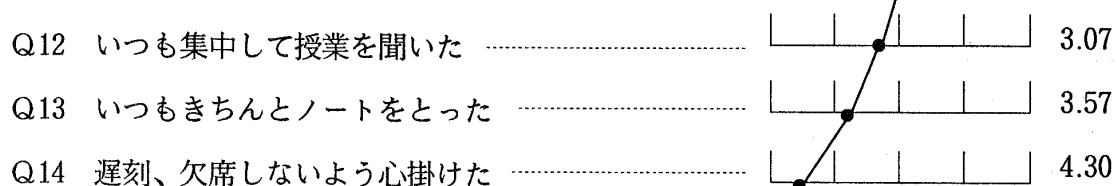
(1) 授業の内容について



(2) 授業の方法について



(3) あなた自身について



(4) その他

Q15 その他、具体的な意見や提案があったら自由に書いて下さい。(裏面)

対に、自信を持って行った授業でも、学生の勉学態度の甘さから、学生の評価が低くなるかもしれない。

それに、評価の観点や基準も違う。

教員の自己評価は「教員として考えた授業の目的や意図が、どこまで実現できたか」ということにあるのに対し、学生の授業評価は「その授業にかけた期待がどれだけ満足されたか」というものから、「課題などが少なく楽な授業だった」というような目先の評価も含まれる。

また、「学生の授業評価」といっても、千葉敬愛短大の学生の知的能力からいって、授業内容に関する学問的水準の評価（質的評価）を学生に求めるのは無理である。そのような理由から、この「学生の授業評価」は、授業に対する学生の関心度や理解度、それに授業方法の巧拙などについての感想や意見に過ぎない。

したがってその結果は、あくまで授業方法改善のための「一参考資料」としての意味しかなく、これが直ちに教員の教育能力や教育業績評価に繋がるものでないことを、予めお断りしておく。

(2) その実施方法と妥当性

【調査の前提】

この『教育原理』の授業は、前期・後期一年間を通じて、幼稚園教員志望2クラスと小学校教員志望2クラスの計4クラス（学生数約200人）を対象にして行われた。授業では毎回、授業内容の骨子を説明する「メモ」と「参考資料」をB5版2枚程度にまとめたプリントを配布し、特定の参考書は使用しなかった。

また、授業時間数は月曜日のクラスが年間26授業時数、水期日の2クラスが29授業時数で3授業時数の違いがあった。それに、この教科に対する学生の関心が幼稚園教員志望者と小学校教員志望者で異なっていたこともあって、4クラスすべて全く同じ授業内容だったわけではない。しかし、授業で取り上げたテーマや話の内容には、この「学生の授業評価」に影響を与えるほどの差異はなかった、と思っている。

【調査の方法】

「学生の授業評価」（調査）の方法には、意見や感想を自由に記述させる感想文形式もあれば、この調査のようなアンケートを中心にした方式もある。そのいずれにも長所と短所があるが、ここでは統計的処理のし易い後者を選んでアンケート用紙（別掲表1『授業についてのアンケート』）に回答してもらった。質問は

- (1) 授業内容について (Q1～Q7)
- (2) 授業方法について (Q8～Q11)
- (3) あなた自身について (Q12～Q14)
- (4) その他 (Q15、自由記入)

の15問からなり、各問とも

[5] そう思う(5点)

[4] どちらかと言えばそう思う(4点)

生たちの意見や感想を聞いて、授業の改善の資料にしようと思ったからである。多くの大学で行われている「学生の授業評価」も、この授業改善を主たる目的としたものである。

もっとも、学生による授業評価などは信用出来ないし、利用価値もない、という考え方もないではない。それはそれで一つの見識であろうが、大学はどこまでも「学生あつての大学」である。たとえ多少の疑問はあっても、学生の意見が全く参考にならないことはなかろう、と考えた。

(註) 文部省の調査によれば、平成7年度に「学生の授業評価」実施した大学・短大は全体の約20%に当たる138大学を数え、急速に増えつつある。その中身や方法、活用の仕方は大学によって異なる。

(その2)

大衆化した大学における学生は、「大学教育という名のサービスを購入する消費者である」と考へた。100万円近い授業料を支払って受講した講義が、それに値するものであったかどうかについて、学生にも不満や意見を述べる「消費者としての権利」のようなものがあるはずである。逆に言えば、教師には、高い授業料に値する授業(教育サービス)を提供する努力義務のようなものがあり、「学生の授業評価」は、その一方法であろうと考えた。

(その3)

それにもし、もしこれが会社であれば、決算期には必ず各人、各セクションごとの年間活動が「営業報告書」にまとめられ、業績評価が行われる。大学も、研究と教育を目的にした組織(社会的存在)である以上、少なくとも学年末には、「学生の授業評価」を含めた「授業活動報告」のようなものを、組織の一員である教員一人一人が、自己責任として公表すべきではないか、と考えた。

(その4)

さらに今後の大学は、「開かれた大学」を目指し、できるだけ多くの内部データを公表する必要がある、と考えた。この「学生の授業評価」なども、大学が学生の教育に力を入れていることを示すデータの一つである。

これらの諸データを公開すれば、卒業生を採用する企業が「そういう大学を卒業したのなら、採用してみるか」という気になるかもしれないし、高校生が進学志望大学を決める際に「そういう大学なら受験してみたい」と思うかもしれない。

ただ、そうなるためには、全学に共通するデータの統一が必要であることから、ここでは「学生の授業評価」に関する統一基準作りのためのケーススタディを試みようと考えた。

II 「学生の授業評価」の考え方と実施方法

(1) 調査の考え方

「学生の授業評価」と「教員自身による授業評価」(自己評価)が一致するとは限らない。学生からの評価が高かった授業も、教員自身にしてみれば満足のいかないものだったかもしれないし、反

ケース・スタディ —— 『教育原理』に 対する「学生の授業評価」とその問題点

大 石 脩 而

Course Evaluation by Students
— An “Education Theory” Class —

By Shuji Oishi

目 次

I. なぜ「学生の授業評価」(調査)をしたのか

II. 「学生の授業評価」の考え方と実施方法

(1) 調査の考え方

(2) その実施方法と妥当性

III. 学生の評価結果

(1) 概 況

(2) 「学生の授業評価」の問題点

IV. 「学生の授業評価」と「学生の成績」との関係

(1) 「学生の成績」の概要

(2) 「学生の授業評価」との関係

V. おわりに

「学生の授業評価」のもう一つの意味

I. なぜ「学生の授業評価」をしたのか

平成8年度に行った『教育原理』の授業に対する「学生の授業評価」(調査)を試みた。それには、いくつかの理由がある。

(その1)

短大で教えるのは初めての経験だったことから、授業の内容や方法がこれでよかったかどうか、学